

名人・達人 評判倶楽部 THE GREATEST PEOPLE

チャレンジとは 「夢中」になること

PROFILE

田中龍博

日本環境（株） 代表取締役
出身／岐阜県生まれ
血液型／A型
信条／有我夢中
夢／日々是好日
好きな言葉／一笑一生
嫌いなこと／一怒一老



RYŪHAKU TANAKA

ついに10回目を迎えた名人・達人 評判倶楽部。協会にヘリコプターの操縦免許を持っている方がいらっしゃるという情報を聞いた花井さん。早速、その謎の人物の正体を調べ、記念すべき10回目のインタビューを敢行しました。今回、登場する方は日本環境（株）の代表取締役 田中社長。

お話はたんにヘリコプターの話だけでなく、田中さんの人生観なども交えていろいろな方向に楽しく広がり、うなずくことしきりの花井さんでした。

「走る人」から「飛ぶ人」へ

——キリッとして陽焼けしてらっしゃって、見るからにスポーツマンという感じがしますが、スポーツを何かなさってたんですか。

田中「いろいろやりましたが、中学・高校は陸上の長距離ランナーでした。」

——やってみよう、というきっかけはどういうことだったんですか。

田中「今となってはわかりませんが、運命的というか、自分でどうこういうのではなく、何かに走らされている。そういう気がしましたね。出会った先生も有名な方ばかりで、中学のときは岐阜県でもトップの先生でしたし、高校ではオリンピック選手を3人も4人も出している先生でした。運命的というのは、そうしたいいい出会いも含めて、そう思うんですが。」

——すると田中さん自身もかなりのところまで行かれたのでは？

田中「そうですね、おかげさまで、私は1500mが得意だったんですが、高校で県の新記録を出すことができました、東海大会では優勝しました。全国では10番目くらいまで行きましたね。」

——大学では？

田中「大学では何か違うことがやりたかったんです。大学は法政だったんですが、1年の時からアメリカへ行きたい、自分を試したいという強い思いがありました。父親にそう言い続けていましたが、真っ向から反対されました。でも、ずっと言い続けていましたら、両親も折れて、それならということになったんです。

——めでたく念願のアメリカ行きの成就ですね。

田中「それが、条件付なんですよ。しかも4つも。まず、大学を必ず4年で卒業すること。教職の免許を取っておくこと。アメリカの大学を自分で探してちゃんと勉強すること。最後に、青い目の嫁さんを連れて来ないこと（笑）。これを背負ってサンフランシスコへ渡りました。

——なかなかシビアな条件ですね。で、いまのお



嫁さんの目の色は？

田中『約束は守りました（笑）。』

——優秀な長距離選手でいらしたから、留学先でスポーツをおやりにならなかったんですか。

田中『いえ、向こうではハング・グライダーをやっていました。いまでこそ知られていますが、22年前はアメリカでもやっている人は少なかったですね。』

——「走る人」からいきなり「飛ぶ人」になったんですね。こわくはなかったですか。

田中『もちろん、こわいです。最初のうちは本当にこわかった。慣れてからもこわさ半分、楽しさ半分ですね。』

——苦痛と快感は等しい、といいますが、何かを成し遂げる時にこわさを乗り越えた爽快感はたまらないでしょうね。

田中『何でもチャレンジにはリスクが伴うと思うんですよ。私は、楽しみながらチャレンジしたいんです。仕事でもそうです。無理をしたくない。頑張るとか、頑張れとか、よく言いますが、頑張ると無理が生じる。頑張るよりむしろ、夢中になりたい、そう思ってきました。』

——東京オリンピックの「鬼の大松さん」じゃないですが、精神主義、根性主義のような直線の頑張り、現代の風土にマッチしなくなってきてま

すね。夢中になるということは、やりがい、楽しみ、を伴うと思うんですが、いかにして自分をそこへ持っていくか、がありますよね。さて今日メインとしてお聞きしたかったのが、学校まで経営なさっているという「ヘリコプター」のことなんですが....。

田中『これも運命的なんですね。私は小さい頃から「空を飛びたいな」という、飛ぶということの無限の広がり憧れを抱いてて、それがハング・グライダーとの出会いを作ったんだと思うんですが、ヘリコプターは伯父の影響です。伯父は30数年前にすでに鈴鹿サーキットでレーシングエンジンをいじっていた、いわゆるメカニックをやっていたプロなんです。その伯父が小さいヘリコプターを持っていたんです。初めて飛んだのは、環境関係の仕事をするようになってからで、7年くらい前ですね。』

——同じ飛ぶといっても、ハング・グライダーとヘリコプターは随分違うんじゃないですか。

田中『すべて違いますね。なかでも恐怖感。これは全く比ではない。空を飛びたいという願望と恐怖感ギャップがあるんです。私はあのナガシマなどにあるジェットコースターがダメなんですね。』

——その方がヘリコプター、ですか。すごいチャ



レンジですね。

田中「やめようとは何度か思ったか知れません。でも、こんまま引き下がるのは自分自身に腹立だし。その気持ちで続きましたね。」

— 私も一度ヘリに乗ったことがあるんですが、足元が透けてるんですね。こわいの何のって、体をタテに突き抜けていくような恐怖感でした。飛行機はただ乗ってる、という」感じですが、ヘリコプターは、乗せてもらっても操縦そのものを体感するんだなと思いました。

田中「飛行機とヘリでは操縦レベルが違うんですよ。飛行機が10ならヘリは30~40です。静止・バック・右回転・左回転・上昇・斜め上昇・と、あらゆることができます。そのために両手・両足をフルに使うんです。両足は後ろのテールの操作ですね。右手は前後左右、左手は上下しながら絞ったり開いたり忙しいですね。一番こわかったのは、非常事態の訓練の不時着です。上空で回っているエンジンを切って、惰力だけで500メートル四方くらいの場所に着陸するんです。これは何百回やってもこわいですね。惰力を80キロくらいにコントロールしながら降下するわけなんですけど、その時に左右のバランスが大きく崩れる。それを足で、手で、コントロールしながら着地する。その間、約3秒です。」

—...(絶句の花井さん)。

田中「目前に、こう地面が迫ってるんです。それを3秒で何とかしなければならぬ。まさに生死一体ですね。あまりの恐怖に失禁しますよ。地上に降りたとたんに、ハーッ...です。」

— たまりませんねえ...。エレクトーンとピアノを並べて置いて、連弾で「くまんばちの何とか」という難しい曲を弾いている人を見て、びっくりしましたが、あんなので驚いてちゃいけませんねえ。全然違うたとえ出すけど(笑)。大変なお話をいろいろ伺いましたが、一番気持ちよかった飛行というのもひとつ紹介していただけませんか。

田中「セブ島の海岸沿いに飛んだ時のことですね。

どこまでも広がる青く澄んだ海と皿の間に行く時がホントに気持ちよかったですね。その後、スキューバダイビングで海の中を散策したり、と最高でした。」

— この世の海と空の醍醐味を満喫したわけですね。なんて贅沢な(笑)。

田中「いやあ、それがいまは全然できないんですよ。」

— ヘリコプターの学校を創られたのは、ご趣味が高じてですか。

田中「私は、楽しみながら、夢中になりながら、人生を送れたらいいなあ、そして、それが自分の業となれば、これに勝る人生はないんじゃないか。それを送るにはどうしたらいいか、いつもそんなことを考えて来ました。それで共同で出資して学校を設立したんです。」



何かを創り上げて軌道に乗せるまでの プロセスが最も楽しい期間

— 最近はヘリコプターのニーズというのはどうなんでしょう。

田中「バブルの時のようなことはないですが、最低限のニーズはありますね。でも、景気に関わらず、これからは空のアクセスとというのが増えていくと思うんです。運輸省からも、各県にひとつ、航空基地を設けなさい、という働きかけがありますしね。そういうことからしても、何か面白い展開ができるんじゃないかと思っています。機種の価格が高いですから、共同で持ってもいいし、企業と契約を結んで、年に何回飛ぶとかにしてもいいですしね。」

— 阪神大震災では、地上の交通網がすべてやられて、小さな面積でも発着できるヘリコプターが

花井 美紀

花井 美紀
(株) コミュニケーションデザイン代表
イベント司会・コーディネーター、
ビジネスマナーインストラクター、
信用金庫協会女子職員講座の専任講師、
TV、ラジオ等で現在活躍中。



大活躍しましたよね。災害の救助とか、緊急を要する重病の方の移送とか、さまざまな面でヘリの出番も多くなると思います。ご自分が夢中になれたことをビジネスで展開されていかれる田中さんは、大変幸せな方だと思いますが、反面、いつも何か新しいことにチャレンジしたいという願望もお持ちですね。

田中『これはいいのか悪いのかわからないのですが、何かを創り上げて、軌道に乗せるまでのプロセスというのが最も夢中になれる時間であり、楽しい期間なんです。もちろん、ビジネスとして手がけたら、そういう期間が過ぎても決しておろそかにはしません。けれども、軌道に乗せるまでが私の本分としての仕事じゃないかと思っているんです。』

—すると、もう何か新しいことを考えていらっしゃる？

田中『実はそうなんです。まだ「何」とはいえない段階なんです。21世紀に必要とされるビジネスで、是非ひとつ手がけたいと思っているものがあるんです。』

—まずご自分が夢中になってチャレンジし、ク

リアーして、それを「業」として展開する。そして、また新しく....。田中さんはヘリコプターの達人ではなく、21世紀型のニュービジネスの達人なのかも知れませんね(笑)。

